

ものべん

この度は『始発』をダウンロードいただき誠に有難うございます。

この作品は戯曲調となっております。

そのため“獄卒SS企画”の趣旨から若干逸れるかもしれませんが、何卒ご容赦ください。

ご意見、ご感想などありましたら、Twitterのハッシュタグ“#獄卒SS企画”で呟いてくださると有難いです。

それでは、本編をお楽しみください。

平成24年11月12日 ものべん

□駅の待合室 (夜)

古びた駅の待合室。照明は中央にある埃かぶったシャンデリアのみ。クッション性の悪い革張りの長椅子が一脚だけ部屋の真ん中に鎮座している。その長椅子の上で、男1は眠っている。そこへ制服姿の男2が現れる。

明転

長椅子の上で寝ている男1。ボソボソと寝言を話します。

男1「いやあ、もう勘弁して下さい……。それはできません……。いや、そういうわけじゃないんです……」

一呼吸置いて、男2が指で鍵束をジャラジャラと鳴らしながら、上手から登場。舞台中央付近で立ち止まり、上着のポケットから紙を取り出し確認する。

男2 「えーっと、（下手を指差しながら）事務所の消灯良し、（上手を指差しながら）正面ドアの施錠良し、本日の業務は終了、っと。思ったより仕事が少なかつたな」

男1、再び寝言。

男1 「申し訳ございません。この通りです……。いや、パンツまでは脱げま、はい、脱ぎます、すぐ脱ぎます」

男2、男1の声に驚き、後ずさりする。

男2 「えー、ちよつと、えー、誰？」

男1 「はい……。確かに言いました。『何でもする』と、しかし、いくらなんでも、これはちよつと……。できません、はい、決して正座は崩しません」

男2、恐る恐る男1に近づく

男2 「あの、ものすごく追い込まれた状況のようですが、大丈夫ですか？」

男1 「それは無理です。さすがに大き過ぎます。駄目、駄目え！」

男1、叫びながら跳ね起きる。男2、その声と動作に仰天し、尻餅をつく。

男1 「だ、誰？」

男2 「あ、あなたこそどちら様です……、か？」

しばしの沈黙。

男2 「私は、ここで働いているものです。あなたは？」

男1 「あ、あの、俺は……、あれ？」

男2 「どうしました？」

男1 「ここ、どこ？ まったく記憶にない所なんだけど……」

男2 「ご覧の通り、駅ですよ」

男1 「駅？ ああ、またやっちゃったのか……」

男2 「何をやっちゃったんですか？」

男1 「いやあ、俺、って酒を飲むと記憶がよく飛ぶんだよね」

男2 「ほう、それは大変ですね」

男1 「そうなんだよ。特に今回は酷い……。まったく思い出せない」

男2 「なるほど、ということとは、あなたはこの駅の関係者ではないんですね？」

男1 「えっ？ まあ、部外者だけど、なんで？」

男2 「いや、私、配属されたばかりでして」

男1 「へえ、そうなんだ。悪いけど、今、何時か分かる？ てか、終電ある？」

男2 「時間は分かんないです。始発しかありません」

男1 「おいおい、ここは駅なのに時計もないのか？ あんたも駅員なんだから、腕時計くらいしとけよ」

男2 「すいません。必要ないものは付けない主義でして」

男1 「まったく、なんなんだよ。終電ないのかよ」

男1、苛立ちながら、辺りを見回す。その後、自身のポケットを弄る。

男1 「（頭を抱えながら）無い、何も無い。ケータイも時計も財布もバッグも……。どうすんだよお。これじゃ、誰かに連絡もできないし、それに電車もタクシーも乗れないじゃん」

男2 「大丈夫ですよ。気を楽しんでください」

男1 「『気を楽しに』だ？ どう考えても詰みでしょうよ。あんたが金を貸してくれる、って言うのかい？」

男2 「んー、貸しませんね。正確に言うなら、貸せません。なぜなら、私はお金を持っていますからね」

男1 「あんた、使えねえな。もういいよ。俺は歩いて帰る」

男2 「いやいや、それは困ります。それにここをどこだか分かっているんですか？」

男1 「どうせ糞田舎の駅だろ。歩いていけば、夜も明けるだろうし、朝になったら車も動き出すだろうから、ヒッチハイクでもするさ」

男1、歩き出し、上手に向かって消えていく。しかし、数秒後、足早に男2の元へ戻ってくる。

男1 「なあ、ドア、開かないんだけど」

男2 「はい、施錠してますから当然です」

男1 「『当然です』じゃねえよ。早く開けろよ」

男2 「それはできません。これは決まりですから」

男1 「何の決まりだよ。監禁でもするつもりか？ ああ、さては誘拐だな？ おまえは、この国での誘拐事件の検挙率を知ってんのか？ 平均90%だぞ？ まあ、それ以前に俺のために金を払う奴なんていねえから。あんた、悪いことは言わないから諦めなよ」

男2 「ゆ、誘拐だなんて滅相もございません。それに事が済めば、無料で電車も乗れますから」

男1 「無料で？ その前に『事が済めば』、ってなんだよ。まさか如何わしい事を考えているんじゃないだろうな。おいおい、またかよ。勘弁してくれよ！」

男2 「はて、“如何わしい事”とは何でしょう？」

男1 「如何わしい、ってのは、アレがアーなって……。言えるか！ 言えるもんか！」

男2 「落ち着いて下さい。あなたは何か勘違いをしています。いいですか、イチから説明しますね。あなたは死んで、この駅にたどり着いた」

男1 「（食い気味で）なんだ？ 今度は宗教の勧誘か？」

男2 「まあ、最後まで聞いてください。あなたは死んだから（床を指さしながら）ここにいるんです。ここは、そういう所なんです」

男1 「あんた、頭大丈夫か？ ほれ（足をバタつかせながら）、足も付いているし、体調もすこぶる良い。だから、俺は死んじやないよ」

男2 「どうすれば納得してくれるかなあ。そうだ」

男2、上着の内側からモタモタしながら、タブレット端末を出す。

男1 「それ、内ポケットに入れるものじやないだろ」

男2 「バッグは持たない主義でして」

男1 「社会人失格だな」

男2、不慣れな手付きでタブレット末端を操作し、男1の方に液晶を見せる。

男2 「はい、これ、あなたですよ。名前、身長、体重、足のサイズ、生年月日、本籍地、住所、生まれ

てから死ぬまでの経歴、全部乗ってるでしょ？」

男1 「ちよつと貸してみる（タブレットを受け取る）。こういう情報は、興信所に金を積みめばいくらでも手に入るん……」

男2 「どうしました？」

男1 「なんだよ、これ。何で知ってるんだよ。どうなってんだよ」

男2 「（タブレットを覗き込みながら）ああ、あなたが初めてオナニーした日の項目ですね？」

男1 「そこじゃねえよ！ いや、そこも気になるけどさ。一番気になるのは、ここだよ、（液晶を指差しながら）ここ！」

男2 「その項目が何か？」

男1 「どうして、さつき見ていた俺の夢まで把握してんだよ」

男2 「あなたの夢？ いいえ、その項目には、あなたが“死に至った経緯”が書かれているんです。ですから、現実ですよ」

男1 「そんな、まさか……」

男2 「あなたは結婚詐欺に失敗し、被害女性の兄が率いる集団に拉致される。男色の男たちに陵辱されそうになるが、“誰が最初にやるか”という内輪揉めの混乱に乗じて、からくも脱出に成功。だがしかし、逃走途中に立ち寄ったコンビニにて強盗と鉢合わせする。格闘の末、脇腹を複数箇所刺され、帰らぬ人になったんです。ほら、この画像は、絶命直後のあなたですよ。これを見て何か気が付きませんか？」

男1 「なんだよ、これ。俺はグロイの苦手なんだよ」

男2 「確かに超キモいですけど、ちゃんと見てください」

男1 「超キモいとまでは言っていないだろ。わかったよ、ちゃんと見るよ。えーっと、床が血の海になって、白いワイシャツが真っ赤に染まっている。えー、他には……」

男2 「もう充分です。答えが出ました」

男1 「答え？」

男2 「はい、ほら、これ」

男2、ニヤつきながら、男1のシャツを指差す。

男1 「あ、えっ、なんで……」

男2 「今、あなたが着ているシャツは真っ白でしょ？」

男1 「ホントだ……、まるで新品みたいだ。ん、新品？」

男2 「どうかしましたか？」

男1 「わかったぞ。俺が寝ている隙に、あんたが新品のシャツに着替えさせたんだ！」

男2 「えっ？」

男1 「それにあのグロ画像は合成だ。なぜなら、俺はあんなに不細工じゃない。どうやら、詰めが甘かったようだな」

男2 「何を言っているのか、さっぱり……」

男1 「やっぱり、あんたは俺を拉致して洗脳するつもりなんだな」

男2 「もう、いい加減に信じてくださいよ。先に進ませてください」

男1 「冗談じゃない。（左胸に手を当てながら）まだ俺には熱き血潮が流れているんだ！」

男2 「どうやったら信じてくれるんですか……」

数秒間の沈黙

男1 「えっ、あれ？」

男1、忙しく、胸、手首、首筋を触りだす。

男1 「落ち着け。いいか、そんなはずはない。あり得ない。俺は絶対に信じないぞ」

男2 「ああ、死んでいるんだから、脈はありませんよ。最初から、こうすれば良かったですね。まだこの仕事に慣れていないので要領を得ていませんでした」

男1 「そんな……」

男2 「ようやく、納得していただけたようですね」

男1 「じゃあ、俺はこれからどうなるんだ？」

男2、うなだれている男1からタブレットを受け取る。

男2 「“閻魔帳”<sup>えんまちょう</sup> って聞いたことありませんか？ 閻魔様が死者の生前の行為や罪悪を書きつけておく帳

簿のことなんですけど、それがこれです。そして、これを元にして、あなたに審判を下すのです」

男1 「誰が？」

男2 「私が」

男1 「何の審判を？」

男2 「あなたが天国に行くべきか、それとも地獄へ行くべきかの審判です」

男1 「俺は天国に行けるのか？」

男2 「では、さっそく調べてみましょう。少々お待ちください」

数秒の沈黙

男1 「あー、死んじやったのかあ。なんか実感ねえな」

男2 「(タブレットを操作しながら) 死んだ皆さん、そうおっしやるらしいですよ」

男1 「“らしい” ってなんだよ」

男2 「前任者から聞いたんです」

男1 「仕事仲間とかいるのかよ」

男2 「そりや、いますよ。上司もいますし、部下もいます。あ、私は閻魔ではないですよ。閻魔代行です」  
男1 「代行？」

男2 「はい、閻魔一人でこなせる仕事量ではありませんから、分業制です」

男1 「俺がいた世界と似てるな」

男2 「そりや、そうですよ。ほとんどは元人間なんですから。はい、結果が出ましたよ」

男1 「どうなんだ？」

男2 「えっと、目に余るマイナスで地獄行きですね」

男1 「あっさり言うなよー」

男2 「殺されたことを鑑みたとしても、やっぱり詐欺常習犯、ってのは頂けませんね」

男1 「だよなあ。地獄かよー。死んじやうよー」

男2 「いや、もう死んでますよ」

男1 「知ってるよ！ それぐらい凹んでいるんだよ。なあ、どうにかならないの？ 俺だって良い事した

よ？ もっと拡大解釈してくれよ」

男2 「拡大解釈ですか？」

男1 「そう、無意識だけど、“結果的に”良い事をしたとかさ」

男2 「あつ、確かに、そういうのはカウントしていませんね。やってみましょう」

男1 「（小声で）やってくれるのかよ……」

男2 「（タブレットを弄りながら）何か言いました？」

男1 「いや、何でもない。続けてくれ」

男2 「これも結果的に善行かなあ。それとこれもそうだなあ。あ、これも善行つと。これなんか結果的に五人の命救ってるもんなあ。これで終わりかな。よし、トータルが……」

男1 「トータルが？」

男2 「トータルが……」

男1 「早く言えよ！」

男2 「プラスマイナスゼロです」

男1 「俺はどうなるんだ？」

男2 「非常に言い難いことなんです……、生き返ってもらいます」

男1 「はあ？」

男2 「だって、天国にも地獄にも行けないんですから」

男1 「そういうものなの？」

男2 「はい、死ぬ十分前に戻ってもらいます。ですから、コンビニに入店した直後ですね」

男1 「また、あそこに戻るのかよ。仕方ねえ。地獄に落ちるよりはましだ。で、どうやって生き返るんだ？」

男2 「簡単ですよ。（下手を指差しながら）こちらを真っ直ぐに進むとホームになっていきますから、次に来る電車に乗ってください。乗ってたら、気が付くとコンビニに立っているはずですよ」

男1 「電車に乗って現世に帰るなんて、変な気分だな」

男2 「急いでください。あと少しで電車が到着します」

男1 「終電なかったんじゃないのかよ」

男2 「ですから、ここは始発しかないと言ったじゃありませんか。さあ、早く。走って！」

男1 「（下手に走るだしながら）お、おう。世話になったな。じゃあな！」

男2 「（深々とお辞儀をしながら）お気をつけて、行ってらっしゃいませ」

汽笛の音が鳴る。男2、舞台中央に立つ。

男2 「いやあ、騒がしい人だったなあ。改心して、良い人生を送ってくれるといいなあ。よし、今度こそ本日の業務終了、っと。」

上手から何かを叩く音がする。

男2 「えっ、何の音？」

男1 「俺だよ、俺。開けてくれよ！」

男2 「また、あなたですか！」

暗転

【終わり】